

成熟した個であるとはどういうことか
——ヴィジョン・ロジックについての考察——

鈴木 規夫

意識発達の過程がトランスパーソナル段階に至るまえに、人はまず成熟した個としての意識構造を確立しなければならない——これは、トランスパーソナルという学問が発足した当初から、その代表的な理論家たちにより繰り返して主張されてきたことである。

もちろん、近年においては、人間の意識の成長をあまりに単純な直線的な過程としてとらえることの問題も指摘されるようになったが、¹しかし、この警句は、意識の変容という過程に内在する危険にわれわれの意識を喚起する価値ある洞察として、今もなお価値を失っていない。

今日のように、内的世界の探索がますます刹那的な高揚状態に耽溺するための、いわば、快楽体験を獲得するための方途としてとらえらがちな時代において、こうした態度が維持されつづけていることは、トランスパーソナル・コミュニティに参加する人々の思慮深さを証明するものとして、評価されるべきことであろう。

確かに、多くの人が経験的に知るように、トランスパーソナル領域の体験は、意識成長のどの段階においても起こりえるものである。

しかし、今、個人として成熟することのたいせつさが強調されるのは、決してそうした経験的事実が無視されているからではなく、むしろ、そのことがより意識的に認識されはじめているゆえだろう。

もしトランスパーソナル領域の体験があらゆる成長の段階において日常的に起こりえるものであるならば、そうした体験を統合する役割を担う人格の統合機能としての自己 (self) の重要性はますます大きなものとして認識されざるをえない。

すべての実践者が言うように、トランスパーソナル領域の体験は、しばしば、われわれの存在を根底から揺さぶる、とても強烈なものとなる。そうした経験を統合していくためには、ほんとうの意味で成熟した自己というものがどうしても必要とされるのである。

また、トランスパーソナル領域の体験は、体験者に倫理的な責任をもたらすものでもある。トランスパーソナル体験は、そこにおいて意識に開示されたもの (真・善・美) をこの世界に実現させていくための努力を営々と積みかさねていくことをわれわれに要求する。²そうした責任を担うためにまず必要とされるのは、個としての人格的な強さであることはいうまでもないだろう。

その意味では、トランスパーソナル領域の体験とは、必ずしもわれわれを個としてあることの重圧から開放してくれるものではないのである。それは、また、われわれにより重い重圧をもたらすものであるということができよう。

トランスパーソナルという学問の成熟とは、必ずしも研究者たちの研究活動の進展のみによって量られるのではない。むしろ、それは、そうした作業をとおし

て生みだされた洞察がコミュニティーの構成者の日常の実践を援助するものとして確立されることをとおして量られるものでもある。

トランスパーソナル領域の探求が真にすこやかにおこなわれるためには成熟した人格構造が必要とされることを実践上の智慧として強調しようとするこのコミュニティーに横溢する意思は、その意味では、まぎれもなく、この学問の成熟を証明するものであるといえるだろう。

ただ、ここであらためて問題になるのは、成熟した個であるということばで、われわれが果たして何を意味しているのかということである。

成熟した自己構造を構築することのたいせつさがあらためて認識されはじめているときであればこそ、今、われわれはその意味するところを慎重に確認すべきであろう。そうした作業を怠れば、今日、ようやくこのコミュニティーにめばえはじめたこの貴重な問題意識も活かされないままになりかねない。

この論文では、今日のこうしたトランスパーソナル・コミュニティーの状況を視野に入れながら、あらためて、成熟した個人であるとはいかなることであるのかということについて、ケン・ウィルバーのヴィジョン・ロジックということばをヒントにしながらか、検討してみたい。

ところで、ひろく知られているように、ウィルバーは、人間の意識の成長を大まかにプリパーソナル・パーソナル・トランスパーソナルという3つの段階を経て深化する過程であるととらえている。

近年においては、人間の意識の成長というものが実際には複数の領域を持つ複雑な過程であるという認識のもと、こうしたとらえかたには大きな修正がくわえられている。³

ただ、ここで注意しておくべきことは、このあたらしいモデルが、存在する複数の発達領域の価値を単純に水平化しているわけではないということである。それは、人間には並存する複数の発達領域があることを認識すると同時に、それらをひとつの人格の構成要素として統合する主体としての自己というものがあることにも留意しているのである。

たしかに、それは、数ある発達領域うちのひとつなのかもしれない。しかし、その人格の統合機能としての性格上、個人の成長段階を把握するうえで、それは最も重要なものといえることができるだろう。

成熟した個としてあるとは果たしてどういうことを意味するのかという問題について考察していくにあたり、ここでは、この領域の成長のダイナミズムに着目して、議論をすすめていくことになる。

論理性段階の実現

論文『危機の時代におけるトランスパーソナル』⁴のなかでも論じたように、今日においてまず必要とされているのは、ひとりでも多くの人々が神話的論理性 (Mythic-Rationality) 段階から論理性 (Rationality) 段階への意識成長を遂げることである。大量消費型資本主義にもとづいた人類の経済活動がこの惑星の生命

維持機能を急速に破壊しつつある現代において、われわれの集合意識を呪縛する時代精神を対象化して、その妥当性について検討・修正できないことは、必然的にわれわれの種としての存続にとり致命的になるであろう。

こうした検証能力は、支配的な価値観の正当性を肯定することをおして自らの存在に均衡をもたらそうとする神話的論理性段階においては、十全に発揮することはたいへん難しい。そのような能力をストレスフルな状況において継続的に発揮することができるためには、必要とあれば支配的な価値観に「造反」することもいとわれない、論理性段階の意識構造がどうしても必要となるのである。

成人の75%は論理性段階に完全には到達しないというひとつの研究結果⁵が示すように、この自律的な意識構造を確かなものとして構築することは決してやさしいことではない。

それまでに自らの人格に均衡をあたえてくれた存在の基盤を対象化し、それについて、もしかしたらそれがもはや自己の存在のよりどころとするに値しないものであるかもしれないという可能性を意識したうえで、検討することは、われわれにとてつもない不安をもたらすものである。

しかし、さいわいなことに、現代社会においてひとりの成熟した成人として機能するためには、われわれはこうした自律的な意識構造にもとづいて継続的に活動することができることを必要とされるようになりはじめている。⁶

ウィルバーのいうように、個人の意識の成長とは、常にそのひとの生きるコミュニティとの関係性のなかで生起するものである。⁷

現代社会がようやくほんとうの意味において論理性構造を必要としだしていることは、そこに住むひとびとに大きな成長への圧力 (incentive) をもたらすことになるだろう。

論理性段階への人類の進化は実は今ようやくはじまろうとしているのである。

しかし、ウィルバーによれば、この論理性段階は、成熟した個人であるための最初の段階にすぎない。われわれがトランスパーソナル領域の探求を真に健康的・創造的におこなっていくためには、ウィルバーがヴィジョン・ロジックと形容する意識構造が必要とされるのだという。

それはなぜなのか。

今、成熟した個人であることの意味を検証しようとするにあたり、このヴィジョン・ロジックという意識構造の性質についてあらためて確認しておくことは非常にたいせつなことであろう。

ただ、このヴィジョン・ロジックという意識構造については、これまでもウィルバーの著作のなかで繰り返して説明されているために、必ずしもすべての人がその意味することについてあらためて問いなおす必要を感じているわけではない。むしろ、ウィルバーの著作を読んできた人の多くは、自分はそのような「初歩的」な段階はすでに習得していると思っているのではないだろうか。

しかし、ここで注意すべきことは、ひとつのあたらしい意識構造が個人のなかに確立されるためには、それを支えることのできる支持機構 (support system) がコミュニティのなかに十分に構築されねばならないということであ

る。

個人のなかにひとつのあたらしい意識構造が実現されるとは、最終的には、その視点から思考することができるのではなく、その視点から生きることができるということでもある。

しかし、実際にその視点から生きることができるためには、個人的な努力以上のものが必要とされる。そのようなあたらしい視点から自己と世界を経験することの価値を認識するあたらしい価値観にもとづいた文化・社会構造がその人の生きるコミュニティーに広範に構築される必要があるのである。

そうした文化・社会構造の無いところでは、その意識構造はあくまでも個人の私的な領域において存在することを許されるにすぎない。

すでに述べたように、公的なものとしての論理性の開発は、今、ようやくはじまろうとしているにすぎないのである。そうした現代の状況において、もしわれわれが自らはヴィジョン・ロジック段階にすでに到達していると思えば、それは、個人の成長を常に世界との関係性のなかで生起するものととらえるインテグラル思想の基本原則を曲解した、きわめてひとりよがりな理解ということができるだろう。

もちろん、これは、現代においてヴィジョン・ロジック段階への成長に取り組むことが無意味であるということではない。

これから、われわれが集合的に論理性段階を確固としたものとして構築していこうとするうえで、より高い視野からその構造的限界を認識することのできる存在がそこにいてくれることはたいへん価値のあることとなるであろう。そして、そうした視野というのは、ヴィジョン・ロジック段階への成長をはじめた者にしか持ちえないものである。

これからほんとうの意味において論理性というものが実現されようとしているときだからこそ、それが確立されるときに発生するであろうその構造そのものから発祥する問題を認識することのできる目をわれわれは養っておくべきなのである。

その意味では、ヴィジョン・ロジックという意識構造を構築することは、われわれにとり必ずしも遠い未来に先のぼしできる課題ではないのである。

ただ、われわれの注意すべきことは、そのような個人的な精進をとおして開発されるヴィジョン・ロジック構造は、本質的に、集合的進化の支えを持たない脆弱なものにすぎないということである。

ヴィジョン・ロジックという意識構造がほんとうに確立されるのは、それが人類の共同財産として広範に体现され、人間社会のありかたをあらゆる領域において定義するときでしかないのである。

そのような瞬間が到来するまでは、ヴィジョン・ロジックというものは多くの意味においてミステリアスなものでありつづけるほかないのである。

このように考えると、成熟した個人としてあるということばの意味することを理解することが、今日においては、どれほど難しいことであるかわかるだろう。

ヴィジョン・ロジックという意識構造が、これまでに存在しなかった真にあた

らしいものであるためには、今、この時点においてわれわれの思い描くことのできるあらゆるものを凌駕するものでなければならない。真に革新的なものは、常にわれわれを驚かせるかたちであられるものである。

その意味では、成熟した個人としてあることのたいせつな条件となるであろうヴィジョン・ロジック段階の意識がどのようなものであるのかをここで示そうとすることそのものがひどく非合理的なことだということができるだろう。

あらたな意識が人類の普遍的な内的構造として実現されるとき、そこに実際にどのような社会が出現するのかは、まさにそれが実現する瞬間までわからないものである。

しかし、そのような不可知性にもかかわらず、ここであえてそれについての論述をこころみようとするのは、そのいくつかの要素については、おおよその描写が可能であると思われるからである。

あらゆる領域においてそうであるように、意識の領域においても、新時代の常識となる革新的なありかたはまず少数の才能ある人々により予言的に体現される。

そうした人々のありかたについて検討することをおして、われわれは、人類意識がどのようなありかたへと進化を遂げようとしているのか、そのおおよその方向性を把握することはできるだろう。

もしそうした方向性が人間存在のなかに普遍的に息づく成長への衝動を健全に反映するものであるならば、それは、われわれひとりひとりが自己のなかにも発見することができるはずのものである。

ごくごく少数の類稀な才能をあたえられた人々のみに可能なものとしてではなく、人間として存在するそのことをとおしてわれわれひとりひとりに潜在能力としてあたえられているものとして認識されるとき、そうした革新的な意識構造は、われわれが、自らの人生をおして、そして、自らの財産として、開発することのできるものとして立ちあらわれるであろう。

もちろん、そうした能力開発というものが常にひとりひとりの個性との相互作用をおしておこなわれることはいままでもない。そのようにして個性の影響のもとに開発されることをとおして、潜在能力は、はじめて人類の普遍的な構造として共有されるようになるのである。

多くの人々の個性をおして実現されるなかで、そうした潜在能力が最終的にどのようなものとして顕現するのかは、誰にもわからない。また、そのようなことについてあれこれと想像しても、しかたのないことであろう。

われわれにできることは、一部の人たちが体現しているすぐれた能力を、もしそれが人間として真にすこやかにあるためのたいせつな条件であると直感されるのであれば、われわれのなかにも息づく潜在能力としてとらえ、それを自らの個性をおして実現するべく精進することである。

意識進化のダイナミズム

これまでも述べたように、インテグラル心理学は基本的に人間の成長というものを段階的発達のプロセスとしてとらえる。そして、その発達のプロセスがあ

たらしい段階に進もうとするとき、そこには、それまでの段階において築きあげられたものを何らかのかたちでひきつぐ再統合の作業がおこなわれる。⁸

初期の成長段階においては、こうした統合の作業はおうおうにして無意識のうちにおこなわれるようであるが、意識の成長という変容の過程そのものが個人の主体的な意図により主導されるようになる段階においては、この再統合の作業はより意識的になされるものとなる。

これは、ヴィジョン・ロジック段階への意識成長を実現するためには特に重要なこととなる。つまり、人間があたらしい発達段階へと成長するとき、そこには、それまでの自らのありかたに対して、その瞬間に生まれつつあるより包括的な視野から、ひとつの対象として検証をくわえる内省の作業がおこなわれるのである。

この作業をとおして、それまでは自らの主観そのものを構成していた意識構造が客観化され、意識的に関係を持つことのできる対象へと変じるのである。

そのようにして対象化された自らの意識構造は、もはやわれわれを無意識的に拘束するものではなく、われわれが自らの“過去”として内省することができる対象となる。そして、こうした内省の作業をとおして、われわれは、自らの過去を、この瞬間においても自らのなかに生きつづける存在の構成要素のひとつとして再統合するのである。

その意味では、あたらしい意識とは、決して過去を絶ち切るかたちで立ちあらわれるものではないのである。むしろ、それは、それまでの成長のプロセスをとおして追求されてきた主題をさらに深化させる、本質的に過去を尊重するかたちで実現されるものなのである。

もちろん、それは、過去における自らのありかたを無批判に肯定するということではない。真にあたらしいものが生まれるとき、そこには必ずそれまでのありかたが内包していた問題を検証する作業がおこなわれるものである。

しかし、そうした作業が過去からの遺産を必要なかたちでひきついでいこうとする尊重の意識に支えられたものであるとき、それはそれまでのありかたのなかにも何らかの限定的な正当性が存在していたことを認識するものである。

たとえどれほど痛烈な批判となろうとも、それがほんとうにより成熟した意識構造から発せられるものであるならば、それは過去のありかたも何らかの真実をとらえるものであったことを認識する共感に支えられたものとなるはずである。

そして、こうした認識対象のなかに存在する“真実”を共感的に認識する能力こそがヴィジョン・ロジック段階の意識構造の重要な要素となるのである。⁹

自己中心性の克服

人間の意識成長のプロセスをつらぬく主題としてはさまざまなものが挙げられるが、その核心的なものとして、ウィルバーは自己中心性の克服を挙げている。

人間は、まず食欲をはじめとする肉体的欲求を満たすことを最高の関心事とする段階から成長をはじめめる。それは、ある意味では、自らの肉体的な衝動の充足に腐心する最も原始的な状態ということができらるだろう。

しかし、その後、われわれは徐々にそうした段階を卒業していくことになる。

自らの生きる共同体の文化規範を内面化し、その論理のなかで自己の充足を追及していくようになるのである。

そこにおいては、われわれは、もはや自らの肉体的な欲求に完全に支配されているのではなく、共同体の価値観に基づいて自らの行動を統御するようになるのである。

その意味では、文化とは、人間を自らの肉体的な衝動に支配された“動物的状态”から解放してくれる、人間性の解発の装置ということができるだろう。つまり、人間は、文化という個人の肉体的存在を超えた現実を意識を開くことをとおして、自らの自己中心性を克服していくのである。

しかし、これまでも見てきたように、今日において、われわれは、自らの所属する共同体の価値観を盲目的に信奉する意識構造（神話的論理性）をのりこえることを求められている。

今日、異文化との活発な交流をとおして、これまで普遍的なものに見なされてきた共同体の価値観は、実は思いのほか普遍性を欠いたものであることが認識されつつある。そうした状況において、過去から伝えられた価値観を絶対的に正しいものとしてとらえることは、現代という時代がそのダイナミズムを通じて明らかにしている現実の複雑さを拒絶することにつながりかねない。

今日においてわれわれに求められているのは、過去からひきつがれた価値観を対象化し、それが今日の状況のなかで果たして正当性を持つものであるかを主体的に思考する能力（成熟した論理性）なのである。

主体的に思考するとは、決して、検証の対象の価値を否定することにつながるとは限らない。実際、“古い”ものが今日においてもすぐれた価値を有していることに気づかされることは珍しいことではない。

ただ、そうした場合においても、それまでの評価のしかたと本質的に異なるのは、その価値観が一度しっかりと対象化されているということである。

そこにおいては、それらの価値観は、絶対的に信奉されるものとしてではなく、いつの日か、もはやふさわしくないものとして否定されるかもしれない可能性を内包した、いわば、とりあえず妥当なものとして評価されるのである。

そして、そうした瞬間が来たとき、成熟した論理性を獲得している者は、その状況にふさわしいあらたなるものを創造する作業に主体的に取り組むことができるのである。

こうしたありかたは、自らが過去からの恩恵をひきついでいることを意識しつつも、それにかわるものを創造するためには、今、この瞬間に、自立した個人として主体性を発揮することに責任を負わねばならないことを認識する能力から生じるものである。

今日において、そうした創造的態度を可能にする成熟した意識構造が、われわれひとりひとりに求められていることは、もはや疑いようのないところだろう。

しかし、これからの時代において、われわれは、それよりもさらに成熟した意識構造を獲得することを求められている。

確かに、個人として自らの価値観を構築し、それにもとづいて人生を生きていけることはすばらしいことである。

そうしたありかたのなかには、自立した個人としてあることが本質的に内包する孤独を受けとめていこうとする並ならぬ精神的なつよさが息づいている。

「個性的に生きる」という合いことばがもてはやされるようになりすでに久しいが、それがどれほどの不安をともしなうものであるかということに気づいたうえで、なお、それを自らの生きかたとしていこうとする人は実際には決して多くはない。

成熟した論理性に基づいて生きることがそれほどに難しいものであるとするなら、では、それよりさらに成熟した意識構造とは果たしていかなるものなのだろうか。

ロバート・キーガンによれば、論理性の問題とは、まさにそれがたいへん統合性のあるひとつの価値体系を創造することによって由来するものだという。¹⁰それがひとつの価値体系を自律的に創造することのできる主体としてあることにわれわれをあまりにも執着させるために、われわれの他者とのコミュニケーションはあくまでもその価値体系の統合性を保全することを目的としておこなわれることにならざるをえない。つまり、そこでは、他者とは、あくまでも自足したものとして存在する自己から本質的に異化された対象として見なされるのである。そして、そのように認識された対象とのコミュニケーションは、究極的には、自らの主体としての統合性を強化するためになされるものにならざるをえないのである。

そこには、ひとつの価値体系に支えられた自己そのものが、ひとつの虚構（フィクション）であるという認識が根本的に欠如している。

確かに、確固とした世界観に支えられた人は強力な主体性を発揮することができるだろう。しかし、そうしたありかたは構造的に自らの統合性の虜になる危険性を秘めている。

それがすぐれた論理性に支えられたものであれば、あらゆる異論を論駁することができる。しかし、まさにそのすぐれた自己防衛の能力が、よりダイナミックなかたちでの他者とのコミュニケーションに参加することを不可能にさせてしまう危険性を宿しているのである。

そのようなダイナミックなコミュニケーションとは、異なる価値体系をもつ他者存在が実は自らをあらしめるものであるという認識に支えられる営みである。

つまり、そこでは、自らの存在のよりどころをひとつの自足した価値体系のなかにはではなく、それをひとつの独自のものとしてあらしめる他の価値体系との関係性のなかに見いだすのである。

こうした意識構造をとおしておこなわれるコミュニケーションは、それまでのものにとくらべて、真の意味において他者への共感的理解に支えられたものになることができる。

それまでは、自らの自律した存在としての統合性を守るために、それを動揺させるような異なる価値観に対して、構造上、どうしても防衛的にならざるをえなかった。

たとえ他者に対して意識的に寛容であろうとするときにおいても、そうした態度は、論理性という意識構造の生命を守るために、避けられないものであったの

である。

成熟した論理性を備えた人と対話をしているとき、たとえ、その人がどれほど真摯にわれわれのことを共感的に理解しようとつとめてくれても、どうしても彼らが、自らの価値観を脇において、われわれが言わんとすることを理解することができないことに気づく瞬間を経験する。それは、彼らが何も偏狭であるからなのではなく、論理性という意識構造そのものが内包している限界から生じるものなのである。

そして、真の意味において成熟した個であるために求められるのは、まさに、この論理性という意識構造そのものをのりこえることなのである。

どのような批判をも論駁することのできるような完璧な価値観（もちろん、実際にはそのようなものはありえないのだが）を構築して、その圧倒的な権威の下に人々と関係を築いていくことを最高のありかたとする発想はこれまでも存在した。

もちろん、すぐれた論理性を発揮して説得力のあるヴィジョンを構想する能力は、これからの時代においても必要とされつづけるだろう。あたらしい構造というのは、常にそれまでのものをひきつぐかたちであらわれるものである。

ただ、ヴィジョン・ロジック段階においては、論理性にもとづく発想の絶対性が否定されるのである。それは、あくまでもそのあたらしい意識構造の一構成要素でしかないのである。

ヴィジョン・ロジック段階において認識されるのは、あらゆる価値観というものが、その本質において、その人をとりまく生存環境に対応するために構築された「虚構」であるということである。

そして、あらゆる価値観は自らの統合性を維持するために、どうしても、それに脅威をあたえるような情報を拒絶しようとしがちである。それは、論理性というものが内蔵する構造的な限界に根ざすものであるために、ほとんどの場合において、そうした防衛反応は無意識的に発動される。

ヴィジョン・ロジック段階においては、ひとつの価値観と同一化することが、ほぼ必然的に自らをある種の現実に盲目にすることの認識がある。そして、そうした認識に基づいて、そこでは、この世界に並存する価値観が、それぞれどのような盲点を持つものであるのか、そして、それらがどのようなかたちでお互いを補うものであるのかという、ひとつひとつの価値観をむすびつける関係性に意識が向かうことになるのである。

ただ、ここであらためて確認しておくべきことは、こうしたありかたが、決して価値観というものの価値そのものを否定するものではないということである。

確かに、ひとつの価値観を排他的に信奉することには問題があるが、現実が絶え間なくつきつけてくる膨大な情報を整理・統合していくためには、何らかの価値観は必要である。ただ、ヴィジョン・ロジック段階において、われわれは、そうした価値観にとらえられるのではなく、逆に、それをとらえることができるようになるのである。

時代背景

こうした包括的な意識構造が必要とされるようになる背景には、ますます多くの人が日常的に異文化体験をするようになるなかで、世界というものが、ひとつの価値観をもって把握するには、あまりにも複雑なものであるという事実に対する痛切な実感が生まれはじめているということがあげられるだろう。

もちろん、ここでいう異文化体験とは、おうおうにして表面的なものに終わる「旅行者」としてのそれではなく、自己を崩壊の淵に追いこむほどに強烈な、他者の絶対的な他者性の経験をともなうものとしてのそれである。

そうした体験は、いやおうなしに自己完結したシステムとして自らの価値観を構築することが不可能であることをわれわれに思い知らせるものである。

あくまでもひとつの自己完結したシステムとしての自己を維持しながら統合しようとするには、世界に並存する価値観の他者性は、あまりに大きすぎるものであることに気づかされるのである。

そうした現実をまえにしてわれわれにできることは、自らの価値観をしばしのあいだ離れて、他者がどのような主観をとおして生きているのかをとらえようとしてみることだけである。そして、そのためには、他者の価値観を主観的に経験することができなくてはならないのである。

それまでに自らの存在を支えてきた価値観を、たとえつかの間のあいだであれ、相対化することは、文字どおり自己を崩壊させることにつながりかねない、たいへんな危険性をともなうことである。

その意味では、ヴィジョン・ロジックとは、自己の存在を意図的に動揺させることができるほどに強靱な自己を必要とする意識構造である。

しかし、そうしたもの無しには、ほんとうに共感的に他者を理解することはできない。どこまでも、それは自己の価値観に立脚した他者理解でしかないのである。

ヴィジョン・ロジックとは、並存する価値観の間を縦横に往来することのできる、そして、そうした営みをとおして、それらの価値観がどのような関係にあるのかを認識する能力であるということができるだろう。

たとえば、こうした意識構造をとおして発揮されるリーダーシップは、それまでに存在していたものとは本質的に異なるものになるであろう。それは、自らの信奉する価値観を意識的に横におき、他者の価値観を共感的に体験する。そして、そこにどのような方向性をもつ成長の衝動が息づいているのかを認識し、それを、それが内包する特性を尊重するかたちで促進しようとするのである。

そこには、人間の成長というものが本質的には個人の特性を尊重するかたちでしか実現できないものであることの認識がある。あらゆる心理学者のいうように、成長とは決して強制できるものではない。それは支えることができるだけのものなのである。

もちろん、ここで「個人の特性を尊重」というとき、それは、その人の「ありのまま」を肯定するということでは決してない。人間存在を発達という文脈のなかでとらえることそのものが、そうした安易な現状肯定を拒絶するものである。

ここでいわれているのは、ヴィジョン・ロジック段階におけるリーダーシップ

というものが、あくまでも成長の主体がその人自身であることをこころえているということである。そうした「こころえ」とは、人間存在のなかに息づいているいのちが本質的に成長への衝動を宿しているということの認識と尊敬から立ちあがるものなのである。

ただ、多くの発達心理学者がいうように、人間意識の構造的成長とは常に永い時間をかけて進むものである。

過去に流行した「人材開発セミナー」がことごとく失敗したのは、こうした現実を無視して、ある種の高揚状態を参加者のなかに醸成することに腐心したからである。また、集中的に過激な衝撃を人格にあたえることは、しばしばトラウマをもたらす。それは、深刻な場合においては、人格破壊にもつながりかねない。

その意味では、人間の成長にたずさわるためには、必ず、他者の長期的な福利を慮ることができなくてはならない。これは、ヴィジョン・ロジック段階のリーダーシップのひとつの大きな特徴である。

もちろん、こうした態度は、ひとつのルールとして信奉されるのではなく、ヴィジョン・ロジックという構造そのものが構造的に内包しているものである。それは、いのちというものへの敬虔なまなざしからいやおうなしに立ちあがるものといえるだろう。

しかし、こうしたあたらしい意識構造に根ざしたリーダーシップを個人が発揮することができるようになるためには、それを支えることのできる社会的・文化的構造ができあがらなければならない。

そうした条件が整わない限り、そうした高度の意識を発揮しようとする者は、共同体の調和を乱すものとして攻撃され、淘汰されてしまうだろう。

常にそうであるように、ひとつの意識構造が社会のなかに根づくことができるためには、それにふさわしい社会的・文化的構造が整わねばならないのである。

その意味では、真の意識成長のこころみは、われわれが生活する共同体そのものの変革のこころみでもなければならぬ。つまり、真の意識成長とは、必ず内面的変革と外面的変革をともなうものでなければいけないのである。

このように考えると、私が、ヴィジョン・ロジックというものを、現在においては、あくまでも可能性にすぎないものなのであると主張することの意味がおわかりいただけると思う。

「危機の時代」における共同体の使命

これからの時代において、われわれが個人としてヴィジョン・ロジック段階へと真に成長することができるためには、われわれは、自らの所属する共同体の成長に主体的にたずさわることができなくてはならない。

個人がいのちへの敬虔の念を基盤として日常の行動を組織することができるようになるためには、そうしたありかたを真に価値あるものとして評価する共同体がそこになくなくてはならないのである。つまり、そのような高度の意識構造をそなえた者の存在が共同体の成長につながるものであると価値づけることのできる価値観が共同体の文化として生きていなければならないのである。

そして、今日、多くの人にとり、この共同体ということばが意味するのは、日常の大半を過ごすことになる企業組織であろう。

しかし、東西帝国間の冷戦の終結後、ますます熾烈な経済競争に巻きこまれていく企業組織にとって、そのような価値観を許容することは、自らの競争力を溶解させてしまいかねないものとして認識されることであろう。

それがどれほどにすばらしいものであろうとも、現実には実行不可能である――すでに自己の内部にヴィジョン・ロジック段階への発達の衝動を実感している人でさえも、そのように結論しなければならないほどに、過酷な現実が存在しているのである。¹¹

もしそのようなありかたを許容する時代が来るとすれば、それは企業組織をとりまく経済体制そのものが根本的に変わるときでしかない。そして、そのような変化は、基本的に、それまでのありかたに基づいてはもはや生存していくことそのものが不可能であると意識されたときに起こるものなのである。

ウィルバーは言う。「もしインテグラル（ヴィジョン・ロジック的）な社会が生まれるとすれば、それは、今ある神話的論理性を基盤とする社会が崩壊したときであろう。」¹²

しかし、問題は、現在の経済体制が崩壊するときには、人類の存在そのものが絶滅の脅威にさらされるときでもあるということだ。¹³

現在の経済体制の崩壊のあとによろやく再興の作業をはじめることができるのだといっても、そこにその作業をおこなう者が残らないとすれば、そのような主張は無意味である。

多様な研究領域の識者たちが指摘するように、今日、人類は無限成長をテーゼとするその経済活動をとおして自らの生存の基盤そのものを溶解させている。¹⁴急速に深刻化する自然資源の枯渇と自然環境の破壊は、今世紀のうちに人類の生存そのものを脅かすことになるだろう。

そうした「危機の時代」を目前に控えて、変容とは人々が自らの存在が存亡の危機にさらされていることを実感するときにはじめて起こりえるのだと達観しつづけることは、人類にとり致命的なことになりかねない。

今、われわれに求められているのは、地球を、搾取の対象としてではなく、この惑星に住むすべての生物の共有財産としてとらえることである。そして、そのためには、ヴィジョン・ロジックに支えられた地球人としてのアイデンティティーがどうしても必要となるのである。

そのようなアイデンティティーの広範な確立を実現するためには、われわれをとりかこむ共同体がそれを育む場としてはたらくことが必要である。

そして、もし市場原理主義という破壊的思想にとらわれた企業社会がそのような役目を発揮しえないのであれば、われわれは、その破壊性を強制的に抑制する機能を発動することのできる共同体の創造に積極的に取り組むべきであろう。これからの時代において、われわれがどのようなかたちで共同体の再創造というこの歴史的使命を果たしていくかが、人類の運命を決することになるだろう。

個人に課されているもの

この論文では、これまで、ひとつのあたらしい意識構造が確固としたものとして定着するためには、常に、他領域においても、それを維持することのできる本質的にあたらしい構造が確立されねばならないことを強調してきた。

このことは、いやおうなしに、意識成長をたいへん困難なものとする。

それにもかかわらず、自らのなかに息づく成長への衝動に存在を開こうとするとき、われわれは、この成長という課題に個人として果敢に挑んでいくことにならざるをえない。

もちろん、これまでも見てきたように、われわれは、個人としての成長に取り組むことをとおして、他者の成長にも積極的に参加することができるようになってはならない。

しかし、われわれがまず責任を持つべきは、われわれ自身についてである。

これは、成長が他者との関係性とのなかで実現されるものであることを無視することではない。むしろ、これは、そうした関係性に参加する者として、それをすこしでも向上させるために、個人として最低限の責任を果たそうとすることであるといえる。

では、ヴィジョン・ロジックを自らのなかに養うために、われわれは個人としてどのような努力を重ねていけばよいのだろうか。

最後に、フランスの思想家エドガール・モラン (Edgar Morin) の著作 “Seven Complex Lessons in Education for the Future”¹⁶ を参照しながら、この問題について考えてみよう。¹⁷

1. 誤謬と幻想を認識すること

これまでも述べてきたように、論理性段階の意識構造は、それがひとつの正合性のある世界観を創造・維持することに執着するために、しばしば、それを動揺させる情報を拒絶してしまいがちになるという構造的問題を抱えている。

こうした“異物”への恐怖は、本来であれば、この世界に開かれたものであるべき意識をいつのまにか現実から乖離した神話的世界のなかに閉塞させてしまう。

このような論理性構造の問題に対処するためには、われわれは、それが本質的に誤謬と幻想にとらわれてしまう危険性を内包していることを認識することができなくてはならない。

こうした認識能力を育むためには、真の意味における知性と感情の統合が必要とされるとモランは言う。

ウィルバーも述べるように、ヴィジョン・ロジック段階の意識構造は、感情生活の展開する中心的領域となる“からだ”をそれまでにはない包括的なかたちで意識構造に統合するかたちで実現する。¹⁸そこでは、思考活動が、からだの内蔵する智慧を積極的に開放し、統合することをとおして深められるのである。

真に成熟した知性とは、いかなる批判もはねかえすことのできる完璧な整合性を備えた世界観を創造することのできる能力を意味するのではない。むしろ、そ

うした観念を操作することをとおして構築された世界観をすりぬけてしまう現実というものが常に存在していること、つまり、人間が常に神秘にさらされながら生きていかざるをえない存在であることを認識する能力であるといえるだろう。

そうした能力があればこそ、人間は、気づかないうちにいつのまにか固定した世界観のなかに安住しようとする自らの性向を絶えず観察し、それを克服することができるのである。

ヴィジョン・ロジックを開発するにあたり、われわれがまずなすべきことは、こうした自己観察作業を自らに課すことである。

そうした作業をとおして、自らの意識のなかに透明性を育むことが、ヴィジョン・ロジック段階に進むための必要条件となるのである。

2. 真に意味のある知識への感性

ある意味で、成熟した論理性を発達させるとは、この世界が絶え間なくつきつけてくる膨大な情報を咀嚼するためのフレームワークを主体的に創造することである。

しかし、これまでも見てきたように、そうしたフレームワークにもとづいて生きることがわれわれの存在にもたらしてくれる統合の感覚は、おうおうにして、それを動揺させる情報を拒絶するようにわれわれをうながす防衛機能のよりどころともなる。そして、そのために、われわれの「世界」は、膨大な領域を排除した、きわめて偏狭なものとなるのである。

われわれは、自らの世界観が世界の一領域をとらえることができるだけのものであるにもかかわらず、それがそのすべてを説明できるものであるかのように信じこんでしまいがちである。

こうした論理性段階の意識構造の問題を克服するためには、われわれは、自らの構築した世界観がいかなる限界を持つものであるかということについて積極的に思考することができなくてはならない。

つまり、それは自らの世界観がこの世界を照明するひとつの観点としていかなる文脈のなかに存在しているのかということについて思考することができるということである。そして、それは、必然的に、自らの世界観が他の並存する世界観とどのような関係にあるのかを思考することにもつながる。

モランの言うように、ひとつの領域において専門性を確立し、その基盤のうえに真に効果的に行動していくためには、逆に、自らの専門性がとらえられない膨大な領域が存在することを認識する能力が必要とされる。それは、その限界の範囲のなかで、自らの専門性が全体のためにどのように貢献することができるのか、また、そうした貢献が全体に、そして、そこに参加する構成員にどのような影響をあたえるのかを想像する能力ということもできるだろう。

ひとつひとつの専門領域（世界観）を超えるものがあるということ、そして、実は、それとの緊密な関係のなかでひとつひとつの専門領域が存在していること、このことの認識なしには、個人は真の意味おいての責任感と団結感を体験することはできない。

今日において、個人の責任とは、あくまでも専門を共有する共同体に対するものへと矮小化されたものであり、そこでは、時代を共有するすべての人々への責任などというものは、ほとんど無意味なものとなる。

論理性段階の病として今日ますます深刻化する過度の専門化は、全体という文脈を視野に入れたときにはじめて正確にとらえることのできるようになる問題からわれわれの意識を遠ざける。

時代の対峙する問題がますますグローバル化するなかで、このような視野の偏狭化は、われわれをますます無力化することだろう。

今日においてわれわれに求められているのは、ひとつの専門性に準拠して行動しようとするときに、それがこの惑星という文脈にどのような影響をもたらすのかを想像することのできる能力である。

自らの専門性（世界観）のなかに閉鎖するのではなく、むしろ、それをこえる文脈を絶えず意識しようとする態度のなかにこそヴィジョン・ロジックの発現の可能性があるのである。

3. 人類の状況について学ぶこと

こうした文脈への感性を育むためには、われわれは、人間の置かれた状況を理解する必要がある。

すでに述べたように、真に主体的に生きようとするとき、われわれは、この瞬間に自らがどのような状況（文脈）に置かれているのかを絶えず認識しようとするところみつづけなければならない。世界の状況は常に変化しつづけるものであるために、われわれは、過去に獲得した理解に頼りつづけることはできないのである。

絶え間ない時間の流れのなかで起こる世界の変化を見すえながら、常に自己の存在を定義しなおしていく能力——まさにこれこそがヴィジョン・ロジック段階のありかたの特徴なのである。

われわれが個性を持った個人であるということは、決してこの世界から乖離したものとして存在するというのではなく、むしろ、それを受けとめながら存在しているということである。

そこでは、個人としての特殊性を確立する個性化のプロセスは、自己のこの世界との緊密な関係をより深く認識する内省能力の深化をとおして追求されるものとしてとらえられる。

個性とは、ある意味で、この世界に存在することをおして必然的にわれわれにつきつけられるこの世界のすべてを抱擁し、そして、それに対して責任を発揮していく、その主体的なたずさわりのなかに生起するものであるといえるだろう。

20世紀をとおして、人類は高度の大量破壊兵器を開発し、はじめて自らの手で生命そのものをこの惑星から抹殺する能力を獲得した。

ここにおいて産みだされた死は、それまでの歴史を通じて人類が親しんできた、潜在的に意味のよりどころとして対峙することのできるそれとは本質的に異なるものである。それまで、人間にとって、死は、悲劇をもたらすものであるだけでなく、それとひるまずに対峙することをおして、われわれによりよく生きるよ

うに鼓舞してくれる敬虔なものでもあった。しかし、瞬間のうちに都市を蒸発させる大量殺戮の可能性にさらされる状況においては、そのような意味はことごとく剥奪されてしまう。

今、われわれの目のまえには、意味そのものの可能性を破壊してしまう死が横たわっているのである。¹⁹

さらに今世紀において、人類の大量消費型の経済活動をとおして、この惑星の生態系が広範に破壊されるなかで、われわれの種としての存在の危うさはますます痛切に意識されつつある。

モランの指摘するように、現代という時代は、人類の正気と狂気が、種の存在を賭けてせめぎあう時代である。

今日において、われわれが真に個性的に生きようとするとき、われわれは必然的に自らの存在の文脈であるこの時代の葛藤と対峙することを強いられる。

個性ということばがもてはやされるようになって久しいが、ヴィジョン・ロジック段階において、個性的に生きるとは、必ずしも世界との関係を断絶して、思いのままに行動をすることではなく、むしろ、世界がわれわれにつきつけてくる生存条件に創造的に対応することをとおして実現されるものなのである。

ヴィジョン・ロジック段階への成長に取り組むにあたり、われわれは、自らの意識がほんとうに人間の状況に開かれているかを内省することができなければならない。

そうした内省作業に取り組みながら自らのなすべきことを模索することができることこそがヴィジョン・ロジック的な意識の実現に必要とされるのである。

4. 地球人としてのアイデンティティー

人間のアイデンティティーは重層的なものである。

家族や職場などの比較的にちいさな共同体の一員としてのそれだけでなく、われわれはまた民族や国家の一員としてのアイデンティティーも合わせ持つ存在である。

しかし、今日、われわれは、それらをこえる地球人としてのアイデンティティーを構築することを求められている。

ある特定の限定的な共同体に基盤をおくアイデンティティーは（特にそれに排他的にとらえられているときには）、おうおうにして、われわれを他の共同体に所属する人間との衝突に巻きこむことになる。

ヴィジョン・ロジック段階においては、われわれは、必要に応じて、そうした限定的なアイデンティティーを離れて、地球人としての視野から状況をとらえなおそうとする。

現実には、われわれはひとりひとり異なる共同体に所属しているわけで、それらが対立関係にあるときに、個人としてのわれわれも、いやおうなしに、それに巻き込まれることになる。

それは、ある意味では、この世界に生きることが必然的にともなう現実といえるだろう。

しかし、もしそのような対立関係における衝突を闘争的な論理にしたがって解決しようとするのであれば、それは、どこまでいっても、怨恨を生みだしつづける弱肉強食の関係を温存することにしかならない。

また、そこには、その衝突の影響をこうむることになるであろう、その衝突に直截に関わらない人々を慮るところが欠落している。

今日のように、ひとつの衝突（たとえば、国際紛争）のゆくえが人類社会そのものに影響をもたらす状況においては、そうした全体の福利への無関心は深刻な悪影響をもたらしかねない。

そのような危険を回避するためには、どうしても地球人としてのアイデンティティーが必要とされるのである。

それは、われわれにこの惑星という共同体の一員としてこの世界を見つめることを可能にする。

そこでは、日常生活における活動が、自らの個人的・組織的な利益のためだけでなく、同時代を生きるすべての存在、そして、これからの時代を担うことになる世代の福利を見すえうえで良心的に決定されるのである。

あたらしい段階の意識構造が確立されるとき、われわれは全人格的な変容を遂げる。

それは、決して思考構造だけを変えるのではない。

それは、われわれの価値観——つまり、何を最もたいせつなものとして認識するかを決定するフレームワークそのものを変えてしまうのである。

そして、ヴィジョン・ロジック段階においては、そのフレームワークは地球そのものを視野に入れたものになるのである。

ヴィジョン・ロジック段階への成長をめざすにあたり、今、この惑星の福利に責任を持つものとして、われわれはいかに生きることができているのかを真摯に問うことができなくてはならない。

5. 不確実性との対峙

ウィルバーの指摘するように、ヴィジョン・ロジック段階の意識のひとつの特徴は、人間というものが構造的にたいへん異なる“存在の段階”を経験しながら成長する存在であることを認識することができることである。

より高度の意識構造が発現するとき、確かに、そこにはそれまでの意識構造のたいせつな要素をひきつぐ作業がおこなわれる。

しかし、それは、あくまでも、それまでの意識構造を破壊する過程のなかでおこなわれるものである。

そうしたなかで、われわれは、必ず、それまでに存在のよりどころとしていたものを失う喪失の体験をすることになる。

成長とは、そうした喪失のただなかにおいて、あたらしい自己を構築する作業のうえに実現されるものにほかならない。

その意味では、成長とは、それまでの認識構造では把握することのできない構造的に異なる世界観をつぎつぎと体験していく過程そのものということができる

だろう。

そして、ヴィジョン・ロジック段階において、われわれは、そうした過程を歩んできた者として——つまり、ひとつひとつの成長の段階の価値を経験的に知る者として——はじめて、そのことを俯瞰的に認識することができるようになるのである。

こうした認識は、あらゆる段階の世界観が、われわれがより高度の段階に向けてふみだすときに、もろくも崩壊するものであることをこころえている。

自らの世界観の絶対性をどうしても最終的には疑うことのできないそれまでの段階に比べて、ヴィジョン・ロジック段階の意識構造はより本質的に認識という行為の不確実性にかかっているのである。

不確実性ということばが日常語として使われるようになって、すでに久しい。

それは、今日のような激動の時代においては、ごく自然なことであったのだろう。

しかし、ここで注目すべきは、この不確実性ということばが、果たしてどの意識段階からとらえられているのかということである。

確かに、不確実性ということばの意味そのものはヴィジョン・ロジック段階以前の段階においても理解することはできるだろう。

しかし、そこでは、不確実性ということばは、あくまでもすでに存在する世界観を予期せぬ動揺から防御するためのひとつの知的な道具として利用されるにすぎない。

つまり、そこでは、われわれは、不確実性ということばを用いて、実は、それを排除しようとするのである。

真の意味において、不確実性ということばをとらえるためには、不確実性というものを世界観の本質的な構成要素として内包するヴィジョン・ロジック段階の意識構造がどうしても必要とされる。

モランは言う。「……不確実性を溶解しようとする願いは、われわれのこころの病であることにわれわれは気づくべきである……」(p. 75)

もちろん、これは、この世界の成り立ちを認識して、主体性を発揮していく努力を放棄することを意味するものではない。

われわれは、この世界が突きつける不確実性を認識したうえで、そのただなかに果敢に参加することをおして、生きるべきなのである。

それは、世界を再び確実性に満たされたものに回復するためになされるのではない。むしろ、それは、われわれの参加がこの世界の生起に——たとえごく些細なものであれ——影響をもちえることを認識した人間の尊厳を守るためになされるものである。

不確実性という現実をまえにして、自ら主体的にこの世界に参加することをおして、生きつづけてしていく能力——ヴィジョン・ロジック段階への成長をこころみるにあたり、われわれは日常のなかでこうした努力を重ねていくべきであろう。

6. 相互理解

今日において進行するグローバル化の流れは、確実に、われわれに異なる世界観に触れる機会をもたらしてくれている。

しかし、そのことは、必ずしも、われわれをヴィジョン・ロジック段階へと引き上げてくれるわけではない。

むしろ、そうした経験があまりにも深い不快感をともなうとき、それは、むしろ、われわれを異なる世界観により閉鎖的にさせることもある。

こちらが共感的に相手を理解しようとしてこころを開いても、それが同じような態度により応えられない可能性は常にある。

また、そうした態度というのは、ときには、いいように食物にされる危険性すらある。

他者を理解するとは、必ずしも相手のことを共感的な相互理解の可能な存在として見なすことではない。

実際、こうした寛容に根ざした関係を構築するに値しない人間というのは存在する。そうした人間をまえにして必要とされるのは、むしろ、その人の存在を支える世界観がいかなるものであるのかを理解することである。そして、そのうえで、共感的な相互理解が可能であるのかを慎重に判断することなのである。

たとえば、原理主義宗教などの本質的に閉鎖的な思想は、基本的にその思想を信奉しない人々のことを、共感的理解をするための努力を払うに値する存在であるとは見なさない。必要とあれば、彼らは、あらゆる手段を用いて、他者を思想的に教化しようとするだろう。そして、そうしたこころみが成功しない場合には、彼らは、“救済”の名のもとに、われわれの命を奪うことすらいとわない。

そうした人との関係においては、ヴィジョン・ロジック段階に到達した者がお互いにするような共感的な対話をすることなどできるはずはないのである。

しかし、そのような場合においても、われわれは他者を非人間化することは避けなければならない。²⁰

われわれを非人間化することもいとわない者のなかにも人間性を見いだそうとすること——これは、あまりにも報われない営みである。

しかし、この報われることのない営みにコミットすることこそが、ヴィジョン・ロジック段階のありかたのひとつの特徴なのである。

それは、どのような場合においても、他者を人間として理解しようとするこそのものに価値を見いだす。そうすることによって、ヴィジョン・ロジック段階の人間は、人間性というものをあらゆる人間をつらぬく現実として守りぬこうとするのである。

交通・通信技術の発達にともない、異なる世界観を信奉する他者と遭遇する機会はこれからもますます増えるだろう。

しかし、そうした機会を、あらゆる人のなかに人間性を認識する意識構造を確立するためのものとして利用できないことは、あまりにも残念である。

また、それが場合によっては逆に他者に対する閉鎖性を増幅させかねないことを考えると、そうした意識を涵養することなしにいたずらに交通・通信の技術ばかりが発展してしまうことは危険なことでもある。

これまでの歴史において多くの思想運動が証明してきたように、思想（世界観）というものは、おうおうにして、その信奉者を盲目にしてしまう。

今日のグローバリゼーションの動きが、潜在的にそうした世界観の束縛からわれわれを解放するための契機をあたえてくれるものであることはまちがいないだろう。

しかし、そうした状況を真に創造的に活用するためには、われわれは、それにふさわしいより成熟した他者理解能力（それは、あらゆる文化的差異を超越するものとしての人間性を認識する能力である）を発達させることを意図しなければならない。

ヴィジョン・ロジック段階への成長をめざすにあたり、これは、われわれの重大な課題となることだろう。

7. 人類種のための倫理

これまでも述べてきたように、われわれの個人としての存在は常に共同体との関係のなかで生起している。

そして、今日においては、われわれは、地域的な共同体のみならず、それを超える人類種という共同体に参加するものとして自己をとらえなおすことを求められている。

文明の崩壊という惑星的危機に直面するこの時代において、自己の意識を地域的な共同体のなかで限定してしまうことは、現代人として生きるうえで必要とされる包括的視野とそれに根ざす責任を自ら放棄することにほかならない。

ヴィジョン・ロジック段階の意識のひとつの特徴は、個というものが常に絶え間なく変化する環境との関係のなかで瞬間、瞬間に生起するものであることを認識していることであろう。

われわれの存在の文脈が地域的な共同体から惑星的な共同体へと拡大するなかで、われわれの個としての存在も変わらざるをえないのである。

そこでは、不可避的に個人というものが地球の福利に対して責任を負うものとして定義しなおされる。

そして、地域的な共同体だけでなく、惑星的な共同体に対しても責任を担う存在として自らをとらえなおすことは必然的にわれわれの意識を変容させることになる。

ある対象を認識することをおして、われわれは、それをとらえるだけではなく、また、それにとらえられるのである。

地球人としてあることの本質とは、地球というものを真にリアルなものとして意識にとらえ、それが文字どおり自己の存在の構成要素であるかのように、その健康に関心を抱くことである。つまり、地球人としてあるとは、この危機的状況に責任を持つものとして自らをとらえ、そして、それを表現していくことにこころをくだくことを意味するのである。

これからの時代のなかで、われわれは、このような責務をすべての現代人に課されるものとして確立し、そして、その基盤のうえに人類の多様性を尊重してい

かねばならないのである。

ひとつの特異性が真に尊重に値するものであるためには、それがただ単に特異なものであるからではなく、地球人としての意識を広範に確立するというこの危機の時代の課題を達成するために、どのような貢献をすることができるのかという視点からも検討される必要があるのである。

ヴィジョン・ロジック段階においては、確かに、人類を統合するものとしての地球人としての意識の実現が志向される。しかし、そうした統一を志向する動きは、同時に多様性を尊重する動きによりともなわれることになる。

そうした複雑な集合的な意識進化の過程がはじまろうとするなかで、特異性というものについて“質”の観点から検討することができることはたいへん重要なこととなるであろう。

いずれにしても、これからヴィジョン・ロジック段階への成長をこころみるにあたり、われわれは、自らが惑星という文脈を常に意識しなければならない時代に生きていることに気づかねばならない。

もちろん、それが単なる物理的なひろがりとしての地球を意識することでないことはいうまでもない。

それは、われわれ人間がこの惑星の生命維持機能そのものの存続に決定的な影響を持つ者としてひとつの運命を共有している事実を認識するということである。

人類が種として生存するために必要とされる智慧の深化に貢献しようとする已むに已まれぬ良心のはたらき——ヴィジョン・ロジック段階の人間とはこうしたはたらきに衝き動かされる存在であるということが出来るだろう。

まとめ

こうして見てみると、真に成熟した個としてあるということが実際にはどれほど難しいことであるか解るだろう。

ウィルバーのインテグラル心理学においていわれる意識の成長は“頭”だけのものでない。

実際には、それは、思考と感情をむすびつけ、そして、その両方のはたらきに価値という方向性をあたえる人格機能の原理そのものの変容をさすのである。

たしかに、インテグラル心理学においては、意識の成長は、しばしば、認知能力 (cognitive capacity) の発達の過程として説明される。そして、このことは、ときとして、成長というものがあたかも (たとえば数学の問題を解くときにつかわれる) 論理的な思考能力の向上により定義されるものであるかのような印象をあたえ、人々を困惑させる。

しかし、このような懸念は、認知ということばをあまりにも狭くとらえたためにもたらされるものであり、インテグラル心理学において認知能力ということばによって意味されるものとは、まるでかけ離れたものである。

しかし、そうした懸念が、真の人間の成長というものとは全人格的なものとしてとらえられるべきだとするこの時代のすぐれた問題意識を反映するものであることは認められるべきであろう。

Howard・Gardnerのマルチプル・インテリジェンス理論 (The Theory of Multiple Intelligences) の熱心な歓迎にも示されるように、人間の成長というものを多面的なものとしてとらえなおそうというところみは、今日において、人類の重要な課題として認識されている。

インテグラル心理学にたずさわる者として、われわれは、この思想運動がそうした時代の課題に積極的に取り組むところみであることを明らかにするべきであろう。

ただ、人間の成長が全人格的なものであることを認めることは、また、成長というものの困難を認めることでもある。なぜなら、そこにおいては、人格の一側面を向上させることはもはやほんとうの意味での成長とは見なされないからである。それが真の意味において成長として見なされるためには、それが包括的な人格の変容をもたらすものであるときだけなのである。

しかし、そのように成長というものを厳格な視野からとらえなおすことは、やはり、このトランスパーソナルという運動にとって価値のあることであるといえるだろう。

そうした視野が確固としたものとして構築されるなかで、一時的な高揚状態を成長そのものとして誤解する今もこの運動を蝕む問題は解決に向かうことになるかもしれない。

そして、成長というものにまつわる幻想がとりのぞかれるなかで、われわれは、はじめてほんとうの意味で成長という課題に取り組むことができるようになるのだろう。

いずれにしても、これまで、このコミュニティーの参加者には比較的容易に実現可能なものとしてとらえられてきたヴィジョン・ロジック段階の意識構造も、その特質についてあらためて考察してみると、それが実に高度なものであることが認識されるのではないだろうか。

これまでもくりかえして述べてきたように、われわれ人類にとり、ヴィジョン・ロジック構造というものは、まだまだ未知なるものなのである。

ヴィジョン・ロジックがひとつの意識構造として確立されるのは、今はじまろうとしている論理性の時代が成熟してからのことになるだろう (今日、人類の直面する危機的状況を鑑みれば、われわれがそのような時代を迎えることができる可能性は必ずしも高いものではないが)。

それまでは、成熟した個であろうとする個人のところみは、常に、そのための文化的・社会的な支援を得ることのできなたいへん過酷な営みとならざるをえないだろう。

今日、トランスパーソナル・コミュニティーの参加者たちが想いをあらたに取り組みはじめた成熟した個の追及は、実際には、時代の支配的な価値観を大きく“逸脱”する、そして、それゆえに同時代の不理解に恒常的にさらされる営みとならざるをえないだろう。

また、この営みは、それがこれまでにこのコスモスに種の共同財産として存在することのなかった意識構造を生みだそうとする本質的に実験的なところみであ

るゆえに、自らのなかに息づく創造性だけを頼りにして“いきあたりばったり”に実現の方法を模索していく、常に不安にさらされる過酷な営みとなるだろう。

しかし、同時に、成熟した個としてあるということが、実は、先達によりすでに完成された意識構造を会得するのではなく、まだその具体的なすがたについてはほとんど決定されていない本質的に未完成の意識構造の生成に参加することであることを認識することは、われわれに不思議な高揚感と責任感をもたらしてくれる。

それは、このコスモスに真にあたらしいものが生起する瞬間にいわせるものだけが体験することのできる特権といえるかもしれない。

今日、われわれは自らのなかに息づく成長への衝動に自らの存在を開くことをとおして、そうした瞬間に生まれあわせたことがつきつける責任に答えていかねばならないのである。

もしわれわれがこの危機の時代を生き残ることができるとすれば、それは、種として成熟した論理性段階への成長を遂げることをとおしてだろう。

しかし、そうした成長が論理性という意識構造が構造的に内蔵する問題にとらわれずに進行することができるためには、さらに包括的な視野を備えた者の智慧に支えられる必要があるだろう。

その意味では、今、ひとりでも多くの人がヴィジョン・ロジック段階への成長をはじめめることは、これからはじまろうとする論理性段階の意識への集合的進化にとり、たいへん価値のあるものとなるということができる。

モランのいうように、現代は、人類の正気と狂気が、種の存在を賭けてせめぎあう時代である。

成熟した個であることに取り組むことをとおして、論理性段階の実現に貢献することは、そのまま、人類の正気の増幅に貢献することにつながるだろう。

それは、この時代において真のトランスパーソナル領域の探求者であろうとすることが不可避的にもたらす巡りあわせなのかもしれない。

Endnotes

¹ Wilber, Ken (1997). *The eye of spirit: An integral vision for a world gone slightly mad*. Boston: Shambhala.

² Cohen, Andrew, & Wilber, Ken (2004). The Guru and the Pandit: In search of a new moral compass. *What Is Enlightenment?*, February-April, 39-47.

³ Wilber, Ken (2000). *Integral psychology: Consciousness, spirit, psychology, therapy*. Boston: Shambhala.

⁴ 鈴木 規夫 (2004) 『危機の時代のトランスパーソナル』 トランスパーソナル学研究、第6号 (MAY)、93-106.

⁵ Kegan, Robert (1994). *In over our heads: The mental demands of modern life*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

⁶ Kegan, Robert (1994). *In over our heads: The mental demands of modern life*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

⁷ Wilber, Ken (2002). Excerpt A: An integral age at the leading edge. Available at <http://wilber.shambhala.com/>.

⁸ Wilber, Ken (2000). *Integral psychology: Consciousness, spirit, psychology, therapy*. Boston: Shambhala.

⁹ Beck, Don, & Cowan, Christopher (1996). *Spiral dynamics: Mastering values, leadership, and change*. Malden, MA: Blackwell.

¹⁰ Lahey, Lisa, Souvaine, Emily, Kegan, Robert, Goodman, Robert, and Felix, Sally (1988). *A guide to the subject-object interview: Its administration and interpretation*. The Subject-Object Workshop.

¹¹ Korten, David (1995/2001). *When corporations rule the world* (2nd ed.). Bloomfield, Connecticut: Kumarian Press.

¹² 2003年7月にコロラド州ボウルダーにおいて開催されたJFK University主催のセミナーにおける発言

¹³ Heinberg, Richard (2003). *The party's over: Oil, war, and the fate of industrial civilization*. Gabriola Island, Canada: New Society Publishers.

¹⁴ Daly, Herman, & Cobb, John (1989/1994). *For the common good: Redirecting the economy toward community, the environment, and a sustainable future*. Boston: Beacon Press.

¹⁵ Monbiot, George (2003). *Manifesto for a new world order*. NY: The New Press.

¹⁶ Morin, Edgar (2001). *Seven Complex Lessons in Education for the Future*. Paris: UNESCO Publishing.

¹⁷ ヴィジョン・ロジック的な意識は、これまで、トランスパーソナル心理学をはじめとする、成人期における心理成長の可能性について探求する領域の専門家により研究されてきた。しかし、そうした世界の複雑性を尊重する認識のフレームワークを確立しようとするところみは、実際には、トランスパーソナルという領域においてのみならず、他のさまざまな学問領域においても重要な課題として追求されてきた問題でもあった。二十世紀後半における人類の思想活動の重要な潮流を代表する思想家のひとりであるエドガール・モランが、長年の研究をふまえて、現代人がこの危機の時代を真に成熟した人間として生きていくために必要とされるだろう智慧をまとめたこの著作は、われわれがこれからヴィジョン・ロジックという意識構造を構築していこうとするにあたり、貴重な示唆をあたえてくれるものである。

¹⁸ Wilber, Ken (1980). *The Atman project: A transpersonal view of human development*. Wheaton, Ill: The Theosophical Publishing House.

¹⁹ Wyschogrod, Edith (1985). *Spirit in ashes: Hegel, Heidegger, and man-made mass death*. New Haven, CT: Yale University Press.

²⁰ もちろん、必要に応じて、われわれは自己を理不尽な攻撃から守ることができなければならない。モランは言う。「寛容はアイデアに対しては有効である。しかし、冒瀆・攻撃・殺人的行為に対してはそうではない」(p. 84)。寛容を必要としない状況というのは、確かに存在するのである。